

徳富蘇峰記念館

目録 — (10)

「徳富蘇峰と先覚女性(一)」

展示期間◇平成四年一月七日〜十二月二十一日

今年には女性からの書簡を主に展示した。

蘇峰には女性について多くの論文や著書がある。最初にみえるのは「国民之友」に掲載した「日本婦人論(三、四、五号、明治二十年)である。これは福沢諭吉の著書と同じ題である。蘇峰は「日本婦人論」と同じく「国民之友」に掲載した中江兆民の「婦人改良の一策」、植木枝盛の「売淫公許の事」^一、「子婦は舅姑と別居すべし」、金森通倫の「家庭改良論」とあわせて「婦人及び家政」という小冊子にまとめ、民友社から明治二十一年十二月に出版した。よく売れたとみえてすぐに再版されている。この小冊は記念館になく、国会図書館にもないという。もし所蔵の方がおありであれば、是非拝見させていただきたい。「国民之友」の宣伝には「婦人に関する論説にて、加ふるに製本極めて美麗なれば歳暮年頭又クリスマス

識を身につけ、話題の一つも提供できる魅力ある女性になることを望んでいる。この考え方が蘇峰の女性論の根底にいつも感じられる。時代が下って「婦人の新教養」(大正十五年八月、主婦之友社)のなかでは「要は、立たんと欲せば自ら立つ可し、新たにせんと欲せば、自から新たにす可し。日本婦人の運命は、日本婦人自から之を開拓せねばならぬ」と述べている。この他「日本名婦伝」(昭和三年三月、主婦之友社)、「夫婦の道」(昭和三年十二月、主婦之友社)、「時代と女性」(昭和五年五月、民友社)などがある。

蘇峰の周囲には母久子をはじめ、熊本女学校校長竹崎順子、矯風会の創立者矢島梅子などの伯母、同志社で英語を学び、のちに娼婦運動家湯浅治郎の後妻になり、矯風会で活躍した姉初子など、自立した有能な女性がそろっていた。そこで蘇峰は自然のうちに能力のある女性を敬する態度を身につけていた。蘇峰は「偉大なる意志を有する婦人は、偉大なる我儘たらざる者少なし」と言っている。先覚女性の持っていた激しい個性を理解する懐の深さが、蘇峰にはあつたように思う。その理解と優しさが、女性からの多くの書簡を受け取るようになったのであろう。

今回の展示目録は、展示した主な人物の書簡の年月と、内容を簡単に紹介することを主に作成した。「徳富蘇峰関係文書」(昭和五十七、六十、六十二年、山川出版社)三冊には、百十八名、二千三百五十七通の書簡が活字化されているが、そのなかに女性は一人も入っていない。女性の書簡とともに、女性の地位向上に後援した人の書簡もできるだけ紹介した。ただし「徳富蘇峰関係文書」に収録されている人物は、巻数を示すのみとした。

平成四年四月

財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団

理事長 竹越起一

学芸員 高野静子

登場する女性たち

矢島 楫子（一八三三—一九二五年）は蘇峰の母久子の妹で、酒飲みの夫と離婚し、明治五年上京。その途中長崎で船が港に並んでいるのを見て、楫（かじ）は船の主宰であると自から楫子を楫子と改名した。東京で勉強し、桜井女学校の校長をはじめ女子教育に係わり、明治十九年には東京婦人矯風会を創立し初代会頭となり、女子教育と矯風会という二つの船の楫を、大正十四年九十二歳で亡くなるまでとった。石に喰いついても離さないといい気性と徹底力に蘇峰は感心している。

潮田千勢子（一八四四—一九〇三年）は第二代矯風会の会頭。四十歳のとき未亡人となり、子供の教育のために長野から上京し、学びながら矯風会の仕事に参加し、後に田中正造らと足尾鉍毒の実情を世に訴え被害者の救援に働いた。矯風会では佐々城豊寿のよき理解者で親友であった。千勢子の長男伝五郎は東大の電気工学を出、電話や市電の研究をし、福沢諭吉の五女光と結婚した。姑と嫁は同居しないという千勢子の新しい考えに従い、伝五郎夫婦は諭吉の屋敷内に住んだ。千勢子の孫潮田江次氏が、慶応義塾の塾長（一九四七—一九五六年）になった。国木田独歩と豊寿の娘信子の結婚の時、蘇峰とともに親がわりをした。

新島八重（一八四五—一九三三年）新島襄の妻。会津藩砲術師範山本権八の長女。山本覚馬の妹。会津籠城のときには男子とともに奮戦した話有名。明治四年京都に移り女紅場で一時教鞭をとる。明治九年襄と結婚。夫とともにキリスト教の伝導につとめた。蘇峰は在学中、八重を「ぬえ」と言っ嫌っていたが、襄なきあと、つねに親切にした。蘇峰が親の決めた平凡な嫁がよいと思うようになったのは、父一敬と母久子、新島襄と八重夫人の関係を見て、手強い妻は持ちたくないと思ったからという。

佐々城豊寿（一八五三—一九〇一年）は十七歳のとき仙台から勉学の為上京。英語や漢文を身につけ、日本女性で最初に演説をした人といわれている。二十六歳のとき妻子ある軍医と恋をし結婚。外国の禁酒運動の訳を其のまま取り入れ、禁酒会としようとした楫子に対し、豊寿は廢娼運動、一夫一婦人制も唱え、広く社会の悪癖を改良することを主張し、矯風会という名称が生れた。豊寿は「東京婦人矯風雜誌」を発行し、また婦人白標俱樂部を設立し、政治活動を行い、女子の国会傍聴の禁止を撤回させた。女子の家庭内の労働を評価し、婦人の財産権を主張したが矯風会内外から非難された。豊寿の長女が国木田独歩の最初の妻となった信子（一八七八—一九五一年）。独歩の『欺かざるの記』に豊寿は恋愛を邪魔する見えつぱりの頑固な女性として描かれているが、豊寿の四十八通の蘇峰への手紙によって、信子との関係の部分に限っては、独歩が自分本位に『欺かざるの記』を書いていたことがわかる。信子は有島武郎の『或る女』のモデルであると言われているが、小説とはいえ後半はフィクションである。明治二十八年十一月六日付の信子と哲夫（独歩）の連名の手紙は、蘇峰に結婚の労を願ったもので、封筒の宛名書きが独歩で、本文は信子の筆跡。

下田歌子（一八五四—一九三六年）の筆跡は鋭い流れがあり、華族女学校や実践女学校など女子教育者として、背筋をのびした威厳を感じる。歌子にたいし、蘇峰は珍しく我が子の学校について相談をしている。蘇峰は四男六女の父親であった。歌子は子供によく勉強と運動をさせるようにと忠告している。歌子という名は歌才を賞でて皇后からいただいた名で、明治の紫式部といわれていた。

相馬黒光（一八七六—一九五五年）は豊寿の姪で、同じく宮城県の子で、明治女学校に学び、夫愛蔵とともに新宿中村屋を創業。インドのピパーボースら亡命者や芸術家を保護した役割は大きい。蘇峰にピパーボースの思い出をたずねている。豊寿の姪だけあって手紙も正直な鋭いもの。与謝野晶子（一八七八—一九四二年）の筆跡は夫鉄幹の字とそっくりなので、両者の手紙を展示した。よく見ると鉄幹の字はより繊細で神経がゆき

とどき、鋭い線がとても美しい。鉄幹は蘇峰に書誌学的な質問をしている。晶子の手紙は文化学院のバザーに揮毫を願ったり、堂々と蘇峰に甘えている。蘇峰の古希祝賀会にも出席し、そのときスピーチした人は、蘇峰先生のことをわかっていない、蘇峰を語れるのは森鷗外先生だけだろうと故鷗外を懐んだ文を書いている。「君死に給うことなかれ」と日露戦争のとき、弟に寄せた詩は有名。

九条 武子(一八八七—一九二八年)の手紙は赤い巻紙と赤い封筒に書かれている。大谷光瑞の妹で、美人で歌も上手で字もきれいと三拍子揃っている。美人薄命の通り、若くして逝去し人々の涙をさそったという。「天然美の観賞者たるを誇るも、人間美にはほとんど全く盲目だ」と書いている蘇峰も、武子夫人の美しさには盲目ではなかったようである。

岡本かの子(一八八九—一九三九年)の手紙の字は、素晴らしい筆跡のと同稿用紙に書いた乱雑なものと同じである。かの子は、夫と、かの子の崇拜者の青年と同居していた時期があるといわれるので、どちらがかの子の筆跡であるかわからない。夫一平が、かの子の仏典の本に蘇峰の推薦文を願っている手紙も展示。

杉田 久女(一八九〇—一九四六年)は俳人として高浜虚子を師とあがめていたが、虚子の序文がもらえず一冊の歌集も出せず、突然破門されてしまう。小倉から沢山の手紙を出し、それが虚子によって狂者の手紙として発表された悲劇の人。立派な悠々とした筆跡は、「こだまして山ほととぎすほしいまま」に代表されるスケールの大きな、色彩ゆたかな久女の句を象徴しているようである。蘇峰への手紙も愛情豊かに書かれていて、これから推測して、久女の激しい慕情が虚子を迷惑がらせたのかもしれないと思われる。虚子は弟子からの手紙を読んだ後、屑籠に捨ててしまうと書いているが、蘇峰は久女の手紙に返事を出し、また保存している。

以上十人の女性に共通なことは、独身者がいないことである。それぞれの女性が良いにつけ、悪いにつけ夫との葛藤を経験し、人生を踏みしめつ

つ、自分の主張を世にさまざまな形で表している。女性たちが、芸術的な繊細さと、それを世にとりかかるときの大胆さに、世間を恐れない女性ならではの力を感じる。一人ひとりが蘇峰にどういう役を望み、何を期待していたかを見ていくことも面白いであろう。

資料 2

書簡No 矢島梅子 一八三三—一九二五(天保四年—大正十四年) 15通

1 明治22・2・19 封書(発)麴町区中六(受)日吉町二十番地民友社演説会で話してほしい。傍聴者意外に多い。来聴者を選んで招くのではありません。演者として見込みのある人を紹介してほしい。展示

2 明治22・3・1 葉書(発)桜井女学校内(受)赤坂榎坂町五番地池田妹に世話になっている。ころんで残念ながら当分外出できない。

3 明治23・3・19 葉書(発)麴町上一三十三(受)赤坂榎坂町五番地久子宛。海老名姉より兄さま病氣と聞いた。牛込教会の講演を聞きに行く。

4 明治24・5・19 封書(発)麴町上一(受)赤坂小川町五番地猪一郎と健次郎宛。難事なことの相談。米国人の願書出しを見合わせさせる。東京府庁の門を出入するのみでは、何のかわからない。

5 明治27・8・21 封書(発)麴町区上二番地(受)赤坂氷川町紹介により早稲田の方々と二度話をした。夫人の方については、横浜フェリス学校で夏季学校開校、演説願う。展示

6 明治39・11・8 葉書(発)ワシントン(受)相州逗子桜山一敬宛。米国第一大統領ワシントンの住宅絵葉書。展示

7 明治45・1・15 封書(発)麴町区上二番地(受)赤坂南町六丁目新聞切抜入り。新聞記載(東洋汽船主任検査される)事実としたら一大事。

前後策を機敏に願う。

8 明治(29)・2・28 封書〈発〉麴町区女子学院 切手なし

日本婦人矯風会設立第四回、横浜で演説を乞う。展示

9 大正3・5・15 葉書〈発〉赤坂溜池〈受〉青山南町

静子宛。

10 大正5・4・3 封書〈発〉赤坂溜池〈受〉日吉町民友社

井伊雲蔵君紹介状。

11 大正9・2・15 封書〈発〉赤坂新町〈受〉赤坂区青山南町

静子と連名の宛名。四月英国で開かれる会に出席のため、三月五日横浜

を出る。

12 大正10・2・26 封書〈発〉赤坂区新町婦人矯風会本部〈受〉青山南町

母上様の三回忌、世は去り世は来たり、一度会いたい。老婆の身の上相

談を聞いて下さい。

13 大正12・6・12 封書 切手なし

おさなご梅子、東代筆。展示

14 年代不明 葉書

年代不明 葉書

書簡No 潮田千勢子 一八四四—一九〇三(弘化元年—明治三十六年) 2通

1 明治22・7・23 封書〈発〉神田区錦町〈受〉赤坂榎坂町

来る二十七日築地明石町拾五番館で男女親友親睦会を開く案内状。植木

枝盛君も来る。発起人として佐々城豊寿と連名、筆跡は豊寿。

2 明治22・11・23 封書 切手なし

婦人白標俱樂部有志者。国民之友停止の慰めに鶏卵一箱を贈る。千勢子

が書いたと推定。届けたのは工藤さの、相良龍子。

書簡No 佐々城豊寿 一八五三—一九〇一(嘉永六年—明治三十四年) 48通

1 明治(20)・5・10 封書 封筒欠

御愛母愛姉と交際できてうれしい。御高名は承知している。尊兄に会い

たい。

2 明治21・8・24 封書〈発〉宮城県仙台木町末無四番星方〈受〉赤坂榎坂

町五番地

3 ご添書、ご芳書拝受。「言論の自由」四十部送った。

明治21・9・26 封書〈発〉麴町区飯田町〈受〉赤坂榎坂町

婦人洋服の意見を送ったのでご加筆下さい。仙台で美本拝読した。

4 明治22・1・22 封書〈発〉麴町区飯田町〈受〉赤坂榎坂町

湯浅治郎と連名の宛名。新島先生の同志社の勧告に感激、勧告書お送り

下さい。軽少の寄付をしたい。

5 明治22・1・24 封書〈発〉麴町区飯田町〈受〉日吉町甘番地民友社

勧告書落手。

6 明治22・2・28 封書〈発〉麴町区飯田町〈受〉日吉町甘番地民友社

湯浅治郎と連名。同志社の私立大学設立募金のための慈善大音楽会開催

のお知らせの原稿。京橋区木挽町厚生館にて。歌の原稿同封。展示

7 明治22・6・11 封書〈発〉神田区錦町〈受〉日吉町甘番地民友社

十五日午後四時頃来て下さい。植木君、巖本君も来るので食事をした。

8 明治22・7・23 封書〈発〉神田区錦町〈受〉赤坂区榎坂町

潮田千勢子と連名。二十七日築地の拾五番館で男女親友親睦会を開く案

内。展示

9 明治22・7・29 封書〈発〉神田区錦町〈受〉赤坂区榎坂町

男女親友親睦会で条約改正の件について意見を開陳下され、蘇生の心持

ちがした。千歳座に時局の演説を聞きに行き不愉快な目で見られた。先

日の規則書に加筆を願う。

10 明治22・8・8 封書〈発〉神田区錦町〈受〉赤坂区榎坂町

半病人同様具合悪い。大同改進黨派の説を篤と聞き、自分の意見を定め

大兄の高説を拝聴したい。潮田姉も病人があり、伝言が聞けない。

11 明治22・8・29 封書〈発〉神田区錦町〈受〉日吉町甘番地民友社

忙しいなかご来訪ありがたい。潮田姉が会いに行つたがご不在。請願書

は是非大兄に依頼したい。

12 明治22・9・9 封書〈発〉神田区錦町〈受〉日吉町甘番地民友社

水害義損金についてお知らせありがたい。潮田姉と計り大に募りたい。

脳症よくないので塩原温泉に行く。

13 明治22・9・12 葉書〈発〉栃木県下野国下塩原古町楓川楼〈受〉日吉町

民友社

塩原で九日付の芳書拝受。こちらは大嵐。

14 明治22・10・26 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕赤坂区榎坂町

新島先生ご上京の由。世評はもはや非条約勝を得たるように伝え、昨夜は寝られなかった。条約断行に付、建白しようにも時期を失し、大兄をうらむ。新島先生に紹介していただけないか。

15 明治22・11・5 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町廿番地民友社

国民の友の発行停止見舞。大兄は国民の友であるばかりか、国民の救者だ。お暇であれば紅葉のお伴でもいたしましょうか。

16 明治22・11・22 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕赤坂区榎坂町

二十四日 日曜午後四時頃、散歩がてらお茶にいらつしやいませんか。高橋五郎君も一緒に。明日は婦人白標倶楽部の代人として工藤さの、相良龍子参上します。

17 明治22・12・13 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町民友社 切手なし

ご病気の由案じている。しかし大兄の演説を吹聴して婦人を集めたので次回はきつと願います。

18 明治23・2・20 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町四番地民友社 切手なし

なし 倶楽部員より責められるので、忙しいことはわかっているがご来臨を待っている。

19 明治23・3・11 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町四番地 切手なし

月のうち半月は病床にある。十一人の炊事で忙しく、外出できないのは残念。ご芳書と美本うれしく拝読している。

20 明治23・5・22 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町四番地民友社

貧民救助法のご意見ありがたい。福音同盟会に建議案を呈すること大賛成。矢鳥姉は慈善部なので相談したが、案文を示されたのでそれにそって草案する。

21 明治23・10・18 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕赤坂区氷川町

明日十九日午後四時頃より宅に来て欲しい。お相手として植木君も招待する。粗飯をさしあげたい。都合がわるければ日をかえる。

22 明治23・10・19 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕赤坂区氷川町

ご不勝の由、招待は二十一日とし、快方にむかわなかつたらまた延期に

23 明治23・12・13 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町四番地民友社

昨日は長談しすみません。新島夫人が今朝来臨。只今板垣伯より使いがきて、明日の紹介は難しいとのこと。大兄に依頼したい(新島夫人と国会傍聴の件)。

24 明治24・1・11 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町民友社

弥生館の騒動、後藤邸内の怪事を読み嘆息、右事件を特筆し、陰謀悪毒を正そうとして発行停止、四千万にかわり感謝する。

25 明治24・2・5 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町民友社

芳書ありがたい、自分も家族も風邪をひいて苦しんでいる。

26 明治24・4・19 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町民友社

目下女子不奮、集まりが悪く、ご演説を取り消す無礼を許して下さい。潮田姉に酒ほど楽しいものはないとおっしゃったのはご冗談でしょう。

27 明治24・9・27 封書 〔発〕神田区錦町 〔受〕日吉町民友社

解停の新聞を読み愛児に逢った心地。第一日曜にご来臨を。

28 明治25・3・3 封書 封筒欠

五十日間の苦戦、又々発行停止嘆かわしい。植木君の遠逝は百人の政治家を失うより惜しい。女権拡張の道止まりたるように感じる。展示

29 明治26・1・25 封書 封筒欠

「誕生日」出来しだい送って。本日は雪、北海道住居の上は雪を恐れてはならないので、駒場辺を走ってくる。

30 明治26・2・4 封書 〔発〕青山南町六丁目 〔受〕赤坂区氷川町

「誕生日」二部落手。

31 明治26・6・29 封書 〔発〕北海道膽振国有珠郡東紋別 〔受〕京橋区日吉町民友社

引つ越し翌日から農事に従事、種蒔きをし、長居の来客に閉口している。東京を去る日ばう然としたが、国民新聞で矯風会や婦人社会に鞭をあて

32 明治27・1・2 葉書 〔発〕北海道東紋別字船岡 〔受〕赤坂区氷川町

官制葉書に年賀の詞を印刷したもの。蘇峰著「吉田松陰」の札を書込み。明治27・1・21 封書 〔発〕北海道東紋別 〔受〕日吉町民友社

手紙と郵紙四枚の報告書。蘇峰の誕生日を祝う手紙と、北海道の寒さや風俗、人々、村の構成などを伝えた二千八百字の長文。展示
明治27・6・24 封書〈発〉北海道東紋別〈受〉日吉町民友社
北海道よりの地震見舞。朝鮮事件又々総選挙など国家の多事多難な時、お忙しいでしょう。

明治27・12・6 封書〈発〉日本橋釘店〈受〉日吉町民友社
三日前に上京した。潮田姉より貴宅で戦地実況の話があったことを聞いた。本支(主)南洋行の用意をしている。

明治28・1・22 封書〈発〉日本橋釘店〈受〉日吉町民友社
寄贈された『大日本膨張論』を読んでいる。婦人矯風会も宗教も改革の時期到来。お忙しいでしょうが一回の演説会もないのは心配。ご助力を願う。

明治28・2・24 封書〈発〉日本橋釘店〈受〉広島市大手町四丁目福井方
広島にご出張の由。紙上で「丁汝昌追悼文」を拜読立いた。威海衛の乗組員の負傷者を慰めたい。三十円集めたが、食物がいいか金がいいか返事願う。娘の学問の方針で相談したい。千秋の思いで待っている。

明治28・3・7 封書〈発〉日本橋釘店〈受〉広島市大手町四丁目福井方
早速の返事ありがたい。物品なら何がよいか教えて。小妹(豊寿)近々入院。九月六日に北海道から帰った。明晩息子を(同志社に)送っていくので社まで尋ねたが留守だった。

明治28・10・14 封書〈発〉佐々城(蘇峰の加筆)
〈受〉赤坂区氷川町
九日夜十二時に書いた哲夫の手紙が座敷に落ちていた。主人に見つかり読んだが、その文中に近日是非密会したいとあり主人が怒った。嚴重な処分を願う他ない。もう一度ご考慮を煩わしたい。この書一読の上火中に(国木田一件と封筒の表に蘇峰の朱字あり)。

明治28・11・9 封書〈発〉佐々木豊寿〈受〉赤坂区氷川町
切手なし

潮田姉からの伝言はもつともとは思いますがこちらは苦しい。彼等(独歩と信子)死を決しているというのであれば、力役でもしたらよいだろう。

情ないことと血涙禁することができない。二条件その他潮田姉から聞いてほしい。
明治28・11・17 封書 裏書なし〈受〉赤坂区氷川町
(結婚が)首尾悪しくも済んだこと潮田姉から聞いた。先生のご厚情は身に徹して感謝している。竹越氏は結婚のことを新聞で吹聴するとか手紙を配るとか勧めるが、不名誉と恥辱に苦しんでいる親にたいし同情がない。

明治29・3・23 封書〈発〉日本橋釘店〈受〉赤坂区氷川町
病氣見舞。
明治29・5・5 封書 裏書なし〈受〉日吉町民友社
過日万(離婚)都合よく取り計らい下され感謝。脳病のため昨月二十五日から転地療養をし、昨日帰ってきた。ご出発(外遊)間近でお忙しいでしょうが会食したい。

明治34・1・25 封書〈発〉淀橋町元柏木〈受〉青山南町
豊寿最後の手紙。三十九歳の誕生を祝賀します。参上したいが病気のため、取り敢えず祝詞まで。病床にて。
45 年代不明書簡
46 年代不明書簡
47 年代不明書簡
48 年代不明書簡

書簡No
植木枝盛 一八五七—一八九二(安政四年—明治二十五年) 28通

1 明治(19)・12・2 封書 封筒欠
あなたの雑誌に登載される栄をよこんでいる。

2 明治(20)・2・11 封書〈発〉植木枝盛〈受〉赤坂区靈南坂十五番地 切手なし
土佐の浜田茂吉、中川駿馬上京する。面接、御指導下さい。
3 明治20・3・9 封書〈発〉土佐高知小高坂桜馬場六号地〈受〉赤坂区靈南坂十五番地

原稿送った。見聞の上収録下さい。出版したい原稿がある、もし出版の道があればありがたい。
4 明治20・4・24 葉書〈発〉土佐高知小高坂桜馬場六号地〈受〉榎坂町五番地国民之友発行処

備中柴原宗介から徳富君の文章(六合雑誌、毎週新報などに掲載の)を出

版する序文を頼まれ書き与えた。出版のことご存じか。

5 明治21・3・19 葉書〈発〉土佐高知小高坂桜馬場六号地〈受〉榎坂町五番地民友社

貴命により原稿送る。メール新聞恵投くだされ当新聞に訳して掲載する。

6 明治(21)・7・25 封書〈発〉大阪東区大川町六十九番地〈受〉日吉町民友社 切手なし

『国民大会議』一冊呈上。貴雑誌に一言紹介願えれば幸い。

7 明治(21)・9・23 封書 封筒欠

別紙差出しておくので、いつでもよいからご掲載下さい。近いうちに上京のつもり。

8 明治21・11・8 封書〈発〉大阪東区大川町六十九番地〈受〉日吉町民友社 宛名湯浅治郎と連名。上京の節はご厚意ありがとうございます。再び参上したい覚悟。

9 明治21・11・20 往復葉書〈発〉大阪東区大川町六十九番地〈受〉西京三条小橋万屋方

万屋にいつまで滞京お知らせしてほしい。

10 明治21・11・22 封書〈発〉大阪東区大川町六十九番地〈受〉京橋区日吉町二十番地

「婦女之権利」の目次同封。長文。「東洋之婦女」の原稿別便にて送った。女学雑誌に見せて出版の相談を願う。製本は大阪でしてそれを女学雑誌

11 明治22・1・1 葉書〈発〉浪華〈受〉京橋区日吉町二十番地

年賀 別紙不都合なければ掲載下さい。だめならご返送下さい。他へ送るので。

12 明治22・1・23 封書〈発〉西京大阪東区大川町二十番地

13 明治(22)・6・3 封書〈発〉芝兼房町虎屋〈受〉日吉町二十番地民友社

切手なし 大阪より郵送し保存願っていた「東洋之婦女」と題する原稿

14 明治22・6・5 封書〈発〉茨城県下〈受〉赤坂区榎坂町

湯浅と連名。赤坂会堂にて演説するよう頼まれたが、茨城に旅行するこ

とになり貴命に従がえない。寓所に来た使いの青年に宜しく。

15 明治(22)・10・8 封書〈発〉東京芝兼房町五番地〈受〉日吉町民友社

切手なし 「東洋之婦女」の義心配をおかけした。佐々城(豊寿)夫人

16 明治23・1・1 封書〈発〉大阪東区大川町七番屋敷〈受〉赤坂区榎坂町

枝盛の名刺三枚

17 明治(23)・4・29 封書〈発〉芝口二丁目三番地 聚星館〈受〉日吉町民友社

切手なし おおせに従い写真一枚差し出す。追伸、民友社御中 国民の友神戸の方に届いていない。使いの者にお渡し下さい。

18 明治(23)・5・13 封書〈発〉植木枝盛〈受〉徳富猪一郎 切手なし

19 明治(23)・5・15 封書 封筒欠

玉稿昨夜板垣氏に持参したがいささか行違いの情があると申すので、しばらくお預かりしておく。政論社に行くので午後伺う。

20 明治(23)・6・1 封書〈発〉植木枝盛〈受〉日吉町国民新聞社 切手なし

九州団体の田中賢道、岡田狐鹿、狩野雄一、志波三九郎の東京の宿処教

21 明治(23)・8・7 封書〈発〉植木枝盛〈受〉徳富猪一郎 切手なし

先刻相談したように、別紙正誤文掲載下さい。竹内、林氏のは全文、板垣執事のはその意味を。彼の件が板垣方より漏れたような記載でないよう注意。

22 明治(23)・8・7 封書〈発〉植木枝盛〈受〉日吉町国民新聞社 切手なし

(徳富君在社でなければ編集局者開けてと封筒表にあり)。板垣執事よりの取消し文は板垣本人に相談しての上でない。まだ相談していないので

23 明治(23)・8・12 封書〈発〉植木枝盛〈受〉日吉町国民新聞社 切手なし

24 明治(23)・8・21 封書〈発〉植木枝盛〈受〉日吉町国民新聞社 切手なし

25 明治23・10・25 封書〈発〉植木枝盛〈受〉日吉町国民新聞社 切手なし

高知の土陽新聞の改良にあたり祝文を願う。

「一書状右正に受取候也」証文。
明治23・10・28 封書〈発〉植木枝盛 〈受〉日吉町国民新聞社
彼の問題について晩生の意見は定めてあるが、意見書を組織する材料を
収集中、即時に貴命に従うことができない。

26 明治24・1・1 葉書〈発〉植木枝盛 〈受〉赤坂区氷川町五番地
年賀。

27 明治24・2・17 封書〈発〉植木枝盛 〈受〉徳富猪一郎 切手なし
別紙来る二十三日の国民之友に掲載下さい。時機のあるもので、
掲載できなければ他に相談するので、早速お返し下さい。(植木の書簡二
十八通は「土佐史談」百号と「植木枝盛集」第十巻(岩波書店)に収録。

書簡No 九条武子 一八八七—一九二八(明治二十年—昭和三年) 3通

1 明治()・4・10 封書 切手なし

徳富静子宛。紫の封筒。お礼に玉子を届ける。展示

2 明治()・4・21 封書〈発〉築地 〈受〉徳富猪一郎 切手なし

赤い巻紙、赤い封筒。友達をさそって二時半頃うかがう。展示

3 昭和2・7・11 封書〈発〉下落合 〈受〉大森町入新宿

徳富静子宛。蘇峰先生の詩、記念として大切にす。

書簡No 下田歌子 一八五四—一九三六(安政一年—昭和十一年) 8通

1 明治33・3・15 封書〈発〉永田町下田歌子 〈受〉青山南町

お嬢さまご入学の件については微力なる婦人のみの事にて行き届かない。
スタンプ読めず。展示

2 明治33・3・24 封書〈発〉下田歌子 〈受〉赤坂区青山

ご依頼のこと承知、華族女学校入学希望者多数。入学試験に合格しても
満員で入学できない。九月にたぶん一兩人の欠員がでるだろう。

3 明治33・3・27 封書〈発〉下田歌子 〈受〉赤坂区青山 スタンプ読めず

二十九日午前華族女学校にいる。

4 明治33・4・13 封書〈発〉下田歌子 〈受〉赤坂区青山

お嬢さま入学の件、明十四日午後には居る。習ったことを復習しておく
こと。展示

5 明治33・7・1 封書〈発〉下田歌子 〈受〉徳富先生 切手なし

貴書ご惠与ありがたい。深感謝。ご令嬢さまにはよくご勉学の由うれし
い。なんと早くも早くご入学をと気をもんでいるが、なにごん華族の入学者
も多く、深く心配している。展示

6 明治33・10・3 封書〈発〉永田町下田歌子 〈受〉徳富猪一郎 切手なし
お嬢さまご入学の件、不本意ながら満員。

7 明治33・12・13 封書〈発〉下田歌子 〈受〉青山南町
お嬢さま一日も早くご入学のよう。何分欠員なし。第一にご身体の義、
第二は学業の義、習ったことを無理のない程度にそらんじておくこと。
展示

8 明治34・4・25 封書〈発〉下田歌子 〈受〉赤坂区青山

ご令嬢さまには好成绩でご入学の事に予定。明後日に申すことになつて
いるが、定めてご心配と存じ取り敢えずご報告します。

[注] 蘇峰から下田歌子宛書簡三通が実践女子大学に所蔵されて
いる。明治三十三年三月十四日、三十四年三月二十六日、
三十四年四月二十六日付書簡。図書館の城田秀雄氏に知ら
せていただいた。

書簡No 杉田久女 一八九〇—一九四六(明治二十三年—昭和二十一年) 4通

1 昭和9・11・27 封書〈発〉小倉市富野菊丘 〈受〉大森区山王

九州ご来遊の節講演を拝聴、先生の頬に流れていた尊い汗と、お帽子と
を忘れかねている。当地の銘菓を送った。展示

2 昭和10・4・22 封書〈発〉小倉上富野菊丘 〈受〉銀座西八丁目民友社

先生の自動車をお見送りしないで申し訳なかった。また小倉にいらつし
やるのを待っている。お父君様のようにも思う。展示

3 昭和10・5・15 絵葉書〈発〉巖島 〈受〉銀座民友社

巖島神社参拝記念。

4 昭和12・8・9 葉書〈発〉小倉 〈受〉山梨県山中湖畔双宜荘

夏中元氣にぐらしました。皆々様のお便りが承りたくて。「朝富士をみ

しかの窓に誰が倚る？」展示

書簡No 新島八重子 一八四五—一九三二(弘化二年—昭和七年) 5通

1 明治23・3・5 封書〈発〉京都〈受〉日吉町国民新聞社
亡夫生前より死後にいたるまでのご親切、筆にいいあらわせない。黒梓の封筒。展示

2 明治23・3・12 封書〈発〉新島八重子〈受〉日吉町民友社

横田様託す。礼状、歌一首。「大磯の岩にくだくるしらなみも 玉とかがやく世にこそありけれ」黒梓の封筒。展示

3 明治44・10・11 封書〈発〉京都市寺町通り丸太町上ル〈受〉青山南町
蘇峰の父九十歳の賀礼。

4 大正10・11・6 封書〈発〉京都市寺町通り丸太町上ル〈受〉日吉町国民新聞社
蘇峰と深井英五宛。喜寿記念のため沢山の金子お送り下さり有難う。喜寿の染筆を頼まれてしている。

5 大正12・12・21 封書〈発〉京都市寺町通り丸太町上ル〈受〉日吉町国民新聞社
かぞえて八十歳になる。私のいちごを作っている処まで私に相談なくどうかしている。同志社に全部寄付をした私の精神は地所を切り売りするようなことではない。今しばらく此のままにしておいてほしい。何んがか情けない。お前様(蘇峰)は如何思うかとご相談する。

書簡No 新島 襄 一八四三—一八九〇(天保十四年—明治二十二年) 8通

1 明治21・11・5(スタンプは11月1日) 封書〈発〉西京寺町通丸太町
〈受〉日吉町甘番地民友社

日日新聞云々の件金森に。別紙原稿の印税は湯浅兄に渡して。同志社内
部での争い。同志社の生徒とは談話もできない。

2 明治22・1・13 封書〈発〉神戸諏訪山〈受〉日吉町甘番地民友社

長文、細字、赤丸、青三角などによる多数の書き込みあり。昨十二月末より咳激しく外出もできない。近來政治上の狂気の体。大阪毎日新聞の柴四郎の件。いやみ千万なる天下の志士らの大同団結には信頼できない。

今の勢いでは我が教会から自由平等主義を主張することは殆ど期待できない。民友社宜しくこの重大な責任を負いたまえ。内村鑑三はついに退却。

3 明治(21年7月以降) 封書〈発〉京都〈受〉赤坂区榎坂五番地

大久保真治郎託す。長文。山路一三(鹿兒島の)紹介、渋沢に一万九千円の証書、湯浅氏と談判してほしい。公義氏は根拠もない風評を付せられ、伝導活動できない。愚妻八重の密夫のように言うものがある。小生の米國留守中公義と相通せし様にこそ申ししている。実に言語同断、彼等は小生の面上に墨をぬりつけ、終に小生を世上に立ち得なくしようとしている。真実の信仰なきを悲しむ。密告せしものは〇〇〇〇なる由。言いふらしたのは〇〇氏の由。事実は無根なり。大阪総会大失敗の件。小生小崎氏に昨年の憲法には不同意、この他六項目について意見を言った。この手紙真に焼捨ください。

4 明治22・6・12 封書〈発〉京都市同志社〈受〉赤坂区榎坂町

御一覽の上は焼捨で願う。合併の件。土曜の午前までに榎坂の有志家多数が同志社に、東京には中止説起と電報をしてくれ。自由信徒。

5 明治(22)・6・17 封書 封筒なし

他見ご無用。近頃小崎君らが迫り、小生の合併に関する意見に反対する。世間のうるさきには閉口。眞の自由は世に容れられない。

6 明治22・6(スタンプは6月16日) 封書〈発〉京都市同志社〈受〉赤坂区榎坂町

「草不謝榮於春風——」漢詩。すべて天父に任せる。今より活眼を開き、小生の後任を注目しておきたい。小生よりはるかに優れたメンタマを持った貴兄に後任指名の義を任せたい。小生の固執する主義は自由宗教と自由教育。

7 明治(22)・6・28(夜) 封書 封筒なし

小生一身上万一の事、総長選挙の義は、「世間多凡庸、凡庸占世間」

8 明治22・6・28 封書〈発〉京都市通丸太上ル〈受〉赤坂区榎坂町

赤字による書き込みあり、追伸——一覽の上焼捨ください。小生一身上に關し、仕事を若手に譲らず、あるものは愚妻一身上につき無根の評をなすものもある。同志社の計画は現状を以て満足することはない。小生心に常に爽快の感情を起こさせる者は貴兄と二、三の同志者学生ある

のみ。「見ぬふりや、聞かぬふりやら知らぬふり、馬鹿のふりして世を渡るかな」

〔注〕新島から蘇峰への書簡百十二通は、『新島先生書簡集』(同志社校友会、昭和十七年)に収録されている。当館の八通は未発表のもの(帖に表装されている)。

書簡No 与謝野晶子 一八七八—一九四二(明治十一年—昭和十七年) 11通(鉄幹と連名二通を含む)

1 大正10・2 封書(発)麴町区富士見町(受)相州逗子

文化学院の趣意書及び規則書パンフレット、入学申込書(印刷物)。封筒宛名は晶子の筆。展示

2 大正10・3・25 封書(発)与謝野晶子(受)相州逗子

ご高著拝受。大きな子供達とくり返し拝読。「太陽とばら」再版できしい署名をして差出します。「人間礼拝」も送ります。一端でもお目にふれらうれしい。

3 大正10・12・17 封書(発)麴町区富士見町与謝野方「明星」編輯発行所
切手なし

文化学院において下さいます有難う。歌の巻を本日持参させる。

4 大正10・12・17 封書(発)麴町区富士見町与謝野方「明星」編輯発行所
切手なし

歌の巻の代金をお遣わされ、お礼申し上げます。

5 大正11・3・5 封書(発)神田区駿台袋町文化学院(受)大森山王
文化学院の第一回バザーに数葉のご揮毫をお願いします。展示

6 大正12・12・17 封書(発)晶子(受)徳富先生 切手なし

赤い封筒。贈り物をいただいて驚いている。明星は休刊している。明年四月から再刊。展示

7 昭和4・12・25 封書(発)下荻窪(受)大森山王

五十歳の誕生日に対する礼状、椿に寄する賀歌(印刷)。宛名書は晶子筆。

8 昭和6・3・11 封書(発)下荻窪(受)大森山王

9 随筆集(街頭に送る)高評に対する礼状。展示
昭和6・5 絵葉書(発)青森(受)日吉町国民新聞社
津軽にてさる踊りを見物、書評礼状、歌一首。

書簡No 与謝野寛(鉄幹) 一八七三—一九三五(明治六年—昭和十年) 6通(晶子との連名二通を含む)

1 明治43・3・10 封書(発)神田区東紅梅町(受)日吉町国民新聞社

唐突ながら志賀先生の如く生駒艦に便乗できるよう特別な計らいをお願い。小生は記事をもって国民新聞紙上に答える。

2 大正11・7・10 封書(発)麴町区富士見町与謝野方「明星」発行所
(受)日吉町国民新聞社

晶子と連名、寛筆。故森鷗外先生の追悼文をお願い。明星に原稿依頼。展示

3 大正11・7・13 封書(発)麴町区富士見町与謝野方「明星」発行所
(受)神奈川県逗子

晶子と連名、寛筆。原稿拝受して感激。森先生に呈する適確にして温情に満ちたご批評。

4 大正12・2・28 封書(発)麴町区富士見町五ノ九
(受)神奈川県逗子

小生五十歳の祝賀会に高書を給わり、幹事が読み、ご芳情に感激。私共夫婦に全く過分の光栄。逗子に行くのを楽しみにしている。

5 大正12・7・5 封書(発)麴町区富士見町五ノ九
(受)神奈川県逗子

35m余、礼状。歴史を文学より好きな妻は先生の著書を愛読して、子供や私に勧めている。天資の才をおもちの先生。私は職業化した文人にはなりたくない時代おくれの潔癖を苦守している。晩年の森先生の長嘆されていたのは遺憾。雑誌の費用を作るために友人が妻とともに計画した画会に、先生がご加入下さったこと感激。

6 昭和2・1・30 封書(発)麴町区富士見町与謝野方「明星」発行所
(受)大森山王

宮内省の「徒然草」の考証、昨年二女の結婚についてご来駕ありがたい。

展示

書簡No 岡本かの子 一八八九—一九三九(明治二十二年—昭和十四年) 2通

1 昭和9・12・18 封書(発)赤坂区青山高樹町三(受)大森区山王
原稿用紙。私の宗教戯曲が尾上菊五郎で上演される。見て下さい。券二枚同封する。展示

2 昭和12・7・13 封書(発)赤坂区青山高樹町三(受)大森区山王
麗筆。日日新聞で拙著『女性の書』を好評有り難い。粗品送った。展示

書簡No 岡本一平 一八八六—一九四八(明治十九年—昭和二十三年) 2通

1 昭和9・11・21 封書(発)赤坂区青山高樹町三(受)徳富蘇峰 切手なし

かの子が大東出版から『仏教読本』を出す。出版書肆が先生のご推薦の一言をといてるので宜しくお願ひ。

2 昭和14・6 封書(発)青山高樹町三(受)大森山王
印刷、添書きあり。かの子の手書きの観音教一卷記念のため複製。一平が届ける。挨拶状は太郎と連名。

書簡No 佐々城(国木田)信子 一八七八—一九五一(明治十一年—昭和二十六年) 1通

1 明治28・11・6 封書(発)麴町区隼町三番地(受)赤坂区水川町
哲夫(独歩)と連名。宛名書きは独歩、本文は信子の筆。親を泣かせ、友を怒らせ前途暗黒たる悲境、生きていく甲斐がない。佐々城氏と相談して宜しいように取り計らってほしい。

書簡No 相馬黒光 一八七六—一九五五(明治九年—昭和三十年) 5通

1 昭和27・11・25 封書(発)新宿中村屋(受)熱海伊豆山晚晴草堂
愛蔵が脳軟化。ピバリ・ポースの日本上亡命記をありのままに書いておきたい。先生からポースの思い出を聞きたい。

2 昭和27・11・29 葉書(発)新宿中村屋(受)熱海伊豆山晚晴草堂
返事有り難い。息子を参上さす。

3 昭和28・4・30 封書(発)都下調布局区内小島分三十九(受)熱海市伊豆山晚晴草堂

アジアの目醒をまとめることができた。通俗に過ぎたように思う。手紙の裏に蘇峰の筆(赤エンピツ)で「佐々城豊寿」とあり。

4 昭和28・6・1 葉書(発)都下調布局区内小島分三十九(受)熱海市伊豆山晚晴草堂

芳書拝受、五日の講演を楽しみにしている。

5 昭和28・6・9 封書(発)都下調布局区内小島分三十九(受)熱海市伊豆山晚晴草堂

お元気な姿に歓喜のあまり涙さえこぼれた。場内にはほとんど青年男女がいないのが不思議。展示

書簡No 相馬愛蔵 一八七〇—一九五四(明治三年—昭和二十九年) 4通

1 昭和12・3・16 封書(発)新宿中村屋(受)大森山王 切手なし
先生の筆跡を友人が欲しがっているので宜しく。滝井平作持参。

2 昭和18・4・30 封書(発)渋谷区千駄ヶ谷(受)大森山王
文化勲章を祝す。七人のうち四人が知人でありうれしい。ポース丈夫な由。

3 昭和26・10・15 封書(発)都下調布局区内小島分三十九(受)熱海伊豆山晚晴草堂

豊寿伯母は当時四十九歳の若さで他界。悲劇の主人公信子は七十四歳で今春他界。一番弱虫とされた黒光が七十六歳で元氣、御配慮を煩したラス・ピハリ・ポース昭和二十一年に逝去。

4 昭和26・10・22 葉書(発)新宿中村屋發送部(受)熱海伊豆山晚晴草堂
お菓子の送り状

書簡No 田中正造 一八四一—一九一三(天保十二年—大正二年) 3通

1 明治25・11・1 封書(発)京橋区三十軒堀讓集会所(受)徳富猪一郎
湯浅治郎氏辞職を本日新聞にて承知、氏は民党で精神明白、衆望もある。突然の辞職事情を伺いたい。

2 明治(34)・9・13 封書 封筒なし

貴国民新聞が治安妨害の旨で発行停止の由を紙上で知った。それは貴社が平生より忘たんとなく正論を主張した結果。貴社のイツモながらの痛言を喜ぶ。国民新聞社編纂局御中。展示

明治34・10・27(夜) 封書(発)東京芝口二丁目六番地越中(亀)方(受)相州逗子

御父上(一敬)と連名。御無沙汰見舞い。余り多忙で何事もこころにまかせない。一月から頭痛で八月中旬から快方にむかった。この書もすこぶる杜選、御身お大切に。

中江兆民 一八四七—一九〇一(弘化四年—明治三十四年) 27通

『徳富蘇峰関係文書』第一卷、『中江兆民全集』第十六卷(岩波書店 昭和六十一年)に収録。

島田 三郎 一八五二—一九二三(嘉永五年—大正十二年) 17通

『徳富蘇峰関係文書』に収録。 第一卷

湯浅 治郎 一八五〇—一九三二(嘉永三年—昭和七年) 7通

同右 第三卷

竹越与三郎 一八六五—一九五〇(慶応元年—昭和二十五年) 45通

同右 第一卷

内村 鑑三 一八六一—一九三〇(文久元年—昭和五年) 5通

同右 第一卷

国木田独歩 一八七一—一九〇八(明治四年—明治四十一年) 2通

同右 第一卷

青木 周三 一八四四—一九一四(弘化元年—大正三年) 19通

同右 第二卷

平成四年三月 学芸員 高野静子 作成